

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02412

研究課題名（和文）真言宗寺院における中・近世期の学問展開に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on the academic development of Shingon-shu temples in the medieval and early modern periods

研究代表者

渡辺 匡一（Watanabe, Kyoichi）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：40306098

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：中世から近世期において、真言宗寺院における学問形成がどのように展開されたかを明らかにするために、長野県諏訪地方における真言宗の談義所である佛法紹隆寺（長野県諏訪市四賀桑原）と、神宮寺末寺である善光寺（長野県諏訪市湖南）所蔵の典籍、特に「教相関係典籍」の調査・研究を中心に、福島県磐城地方における真言宗の談義所である宝聚院（福島県いわき市西小川）、近世期、宝聚院の本寺であった新義真言宗智山派本山である智積院（京都府京都市）所蔵の「教相関係典籍」の調査・研究も併せて行った。佛法紹隆寺所蔵典籍に関しては、全典籍（3000点6000冊）の書誌情報データベースを寺院HPに公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世期における教相関係典籍を対象とする調査・研究はほとんど行われてこなかった。本研究は、近世期における教相関係典籍を調査・研究の対象として用いるところに学術的意義がある。多くの調査・研究が各宗派の大寺院の典籍を対象としているのに対して、本研究は、地域の寺院に注目し、地域寺院における学問展開を明らかにするところに学術的意義がある。各寺院の調査・研究によって、文化財指定を行うところに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify how the academic formation at Shingon-Shu temples developed from the medieval period to the early modern period, we conducted research at Buppou-Shoryuji Temple (Suwa City, Nagano Prefecture), a Shingon-Shu educational institution in the Suwa region of Nagano Prefecture, especially the "Kyoso-sho", we will focus on the collection of books at Hojuin Temple (Iwaki City, Fukushima Prefecture), a Shingon-Shu educational institution in the Iwaki region of Fukushima Prefecture, and in the early modern period, the main temple of the Shingi Shingon-Shu, the Chizan, Chishaku-in (Kyoto City, Kyoto Prefecture), which was the main temple of Hoju-in, was also investigated and researched. Regarding the canons held by Butsho Shoryuji Temple, a bibliographic information database of all the canons (3,000 items and 6,000 volumes) has been published on the temple website.

研究分野：日本文学

キーワード：真言宗 学問形成 佛法紹隆寺 宝聚院

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

寺院の典籍調査・研究としては、国語学を中心とした高山寺典籍文書総合調査団による高山寺(京都市)、青蓮院(京都市)などの調査・研究に始まり、国文学研究資料館による西教寺(大津市)、善通寺(善通寺市)などの調査・研究、大阪大学による河内金剛寺(河内長野市)、随心院(京都市)の調査・研究、名古屋大学を中心とする仁和寺(京都市)、真福寺(名古屋市)などの調査・研究などが挙げられる。これら諸宗派の大寺院の調査・研究によって、経典・和歌・物語・注釈書などの新資料が次々と報告され、中世文学研究に「資料学」なる新領域を創出するに至った。2005年5月、中世文学学会創設50周年記念大会シンポジウムでは「中世文学研究の過去・現在・未来」(青山学院大学)の第一分科会として「中世文学と資料学」が設けられ、中世文学研究の重要なテーマとして位置付けられた。代表者もパネラーの一人として発表した。代表者は、いわき明星大学赴任時(1998-2002)より、特に地域寺院所蔵の典籍に注目し、科学研究費補助金「中世末期浄土寺院における学問の研究」(奨励研究(A)・平成11-12年度)、「中世浄土宗寺院における学問形成についての基礎的研究」(基盤研究(C)(2)・平成14-17年度)の採択を受け、浄土宗名越派の本山であった如来寺(福島県いわき市)所蔵の典籍調査・研究によって、中世、東北磐城地方における浄土宗寺院の学問状況が、中央(都)に匹敵する水準にあったことを論証した。また、信州大学赴任時(2002-)より、科学研究費補助金「中世後期内陸地域における真言宗寺院の学問状況についての基礎的研究」(基盤研究(C)平成19-21年度)、「中世後期真言宗寺院における学問形成についての基礎的研究」(基盤研究(C)平成22-24年度)、「中世前期真言宗寺院における学問形成についての文献学的研究」(基盤研究(C)平成25-28年度)の採択を受け、長野県諏訪地方の談義所(学問所)であった佛法紹隆寺(長野県諏訪市)、東北磐城地方の談義所であった宝聚院(福島県いわき市)の行法次第書を中心に調査・研究を進め、中世後期に信濃、下野、上野、磐城の寺院間で、僧侶たちの交流(ネットワーク形成)が行われ、学問的蓄積がなされていったこと、「行法次第書」を文献学的な見地から考察することにより、「中世前期」にまで遡って、その生成過程を確認できることを明らかにした。

### 2. 研究の目的

真言宗寺院における学問は、大きく「教相」(経典研究)と「事相」(実践的修行)に分かれる。中世期においては、大寺院から地域寺院に至るまで、事相を中心に研鑽が積まれたため、典籍の数も事相関係が八割を占めるといっても過言ではない。代表者も中世期に注目し、「事相」関係の典籍、特に「行法次第書」を中心に調査・研究を進めてきた。

しかし、近世期に入ると、幕府の宗教政策によって、地域寺院においても各派の本山で二十年間にわたり教相の学問が義務付けられることになり、結果として各寺院の蔵書にも、教相関係の典籍がかなりの割合を占めるようになってくる。僧侶の学問形成に大きな変化が起きたのである。本研究は、これまで行ってきた事相関係典籍の研究を土台にして、近世期に起きた真言宗寺院における新たな学問形成の展開を明らかにすることを目的とする。

研究にあたっては、「1. 本山の違いによる差異」、「2. 地域における寺院の役割による差異」に重点を置く。「1. 本山の違いによる差異」については、ともに新義真言宗に属しながら、長谷寺(奈良県桜井市)を本山とする佛法紹隆寺、智積院(京都府京都市)を本山とする宝聚院の教相関係典籍を比較しながら調査・研究を進め、地域寺院においてどのような学問研鑽が積み、新たな蔵書形成がなされていったのかを明らかにする。「2. 地域における寺院の役割による差異」については、地域における僧侶育成の拠点である談議所と、そうで

はない寺院との間に学問的格差が存在したのかを、智積院を本山とする善光寺の教相関係典籍の調査・研究によって明らかにする。さらに、地域の僧侶たちを迎えた本山、智積院所蔵の教相関係典籍の調査・研究を行うことによって、近世期、地域寺院に起きた新たな学問形成の展開を立体的に浮かびあがらせることを目指す。

本研究の目的で、もう一つ重要なことは、「新たな文学研究」の提言である。代表者は、1989年より寺院資料の悉皆調査に関わる中で、調査・研究を行う際にもっとも留意すべきことは、蔵書形成が、寺院それぞれの役割と深く関わり、不断に、変容しながら、近代にいたるまで行われている点であると考えているにいたった。代表者は、仏教文学会シンポジウム「寺院資料調査から拓く文学研究」(平成27年12月)において、「寺院資料調査と文学研究」と題し、寺院資料の研究は時代を「横断」ではなく「縦断」していく必要があること、既存の「文学ジャンル」(物語、和歌、軍記、説話等)ではなく、様々な蔵書環境(大家、和歌の家、藩校、名主等)と並立する、体系的な文学研究を模索しなくてはならないことを提言している。本研究では、中・近世期を縦断して考察を試みることも重要な目的の一つである。

### 3. 研究の方法

佛法紹隆寺、宝聚院、善光寺所蔵の教相関係典籍の情報収集・整理を行い、データベースの構築を行う。並行して画像データの収集作業を行う。

佛法紹隆寺、宝聚院、善光寺のデータ分析により、いつ、どこで、誰から、どのようなことを学習したのかを、古文書も活用しながら明らかにする。

智積院所蔵の教相関係典籍との比較を行い、近世期、地域寺院に起きた新たな学問展開の様相を明らかにする。

画像データをともなったデジタルアーカイブを構築し、当該寺院、信州大学附属図書館のホームページや機関ディポジトリを利用して公開する。

### 4. 研究成果

佛法紹隆寺所蔵の教相典籍は、450点に及ぶ(全3000点)。江戸時代中期、1700年代前半以降の住職の所持本であり、江戸時代の本末制度による、本山での教相の修学が始まったことに呼応すると思われる。同様のことは、宝聚院の教相典籍(230点/1500点)でも確認できる。佛法紹隆寺の教相典籍のうち、260点が『大般若波羅蜜多經』関係、論議に関わるものである(宝聚院は70点)。実際に夏・冬の報恩講に結集した、諏訪地域の僧侶の名簿(結集帳)や、取り上げられた論題、用いられた声点入りの論議書が確認でき(70点)、延享2年(1745)から明治時代にいたるまで、本山で学んだ住職のもと、地域の僧侶たちが教相を学び、成果を披露したことが、具体的に明らかとなった。各寺院蔵書典籍のうち、宝聚院に関しては、文化財の追加指定を準備している。また、佛法紹隆寺に関しては、諏訪市文化財評議委員会での内覧を行い、2024年度内の文化財指定を予定している。佛法紹隆寺の書誌データベースは、「古文書・聖教データベース」として、一部公開を行った(<https://buppou-syoryuji.jp/>)。全面公開の方法等を寺院、プロバイダと引き続き検討している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡辺匡一	4. 巻 70
2. 論文標題 奥州の学僧 純瑜の記した書物 - 寺院の「蔵書」から考える -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 44, 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡辺匡一
2. 発表標題 寺社資料の電子化・共有化による新たな研究の展望と課題
3. 学会等名 Code4Lib JAPAN Conference 2018（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

古文書・聖教データベース <a href="https://buppou-syoryuji.jp">https://buppou-syoryuji.jp</a>
---

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------